佛説御傘

四

へ 5
6627
4

A5
6627
4

相山白鮮

(2602-1614)

鮒鱠法傘

酒

魚二 鮒よい魚中魚天なく
特のよう濃くく特をとへ山
よこやや

さかな 只一鮒よい小魚ごろごろ魚
特魚をといへつくく二
あるこころ魚魚特魚のようむ
白あるこころ特魚とあるへうう
を魚魚くあるくくも二まん
用るあこうこうと特入ようむ
時を特乃宮よきここ次
あり 只一鮒よい二あるるあり
あるよい魚乃ホるるを

巻と なけれハ 面を嫌ふ なめ
なりかゝりよ さるハ七句去
松風乃巻
其乃次ふの巻　川竜の巻 源氏ん
巻貫つらハ須を恥かれ巻の
外今二雄よハあらし源氏よ
ハ二句嫌し沙を恥ありて巻と
なりかの面と嫌ふとさるしハ
七句去とありぬ雖なも同前き
うなめとおらし面三乃間と
又月巻九巻
又云乃巻　村雨
乃面とまハ源氏
与れ花巻三乃巻とやうよ名
乃付ろ巻ハ面乃字よ小ハ三
句其与源氏そうして二句さ
系るわ

あす雲
綴二句綴源氏よ
あらし次天雲之
閼伽結ふ　うち出し又巻とし
魏結し水乃字よ魏漢を
まつし水よ閼伽もあらり
水も同さて不可付と綴也
今案せらは七又永種難
て云魏漢しく同さとし然
文字ともぬ文字とある
昭わあくへし摩訶とらふ
字ハ天文字よ魏もれてお
乃ふとけまし同さこよ昭ろ
為らう数遊とらふ魏字のを
縁仁と魏もれと紙乃海なお
ふ城く若まゆ面まハ結の

宮ぢうも仁乃宮よりも柳の
うつし迦葉しくを梵網の花
乃宮より觀しくうつしまわりくを迦
葉ゐるをとあり迦よりも生歌
うしも可山嶋うしくうつわりくを上
宮殿の宮宮殿をもうく
知くあるうん志つをてやく
らん対きくうつ殿し変られ
も紙色乃紙見の宮うつ決
あるを人開仏（あらい）法山ゐるとあら
乃水しを六重言とうくを
縁をり開仏とつへを歌義よ
かわるし対つへを歌義よ
をうあ決大さ成殿りあを
と奉へを所あしを毎へを紙歌
よう門り義とを法かれい一切の

宮ゐを重をきよりもあのゐく
と日が紙よりもあるまし別
水しをあを神殿乃法よ宮
て神紙よるれを陽離（とも）
出あるあ迦りきうを決ば根
元をゐうを所あるよあ乃宮の民
対くを去迦の法をうく
くを宮のをれをあるをうい
きうを決をもを水乃宮よあい
二句をへし開仏乃ゐあい続変
をりく院よを宮殿よ対れ
をあ法宮をく同をを殿宮を
縁をし開仏を水をいのく重
去殿へを義も殿し開仏よ
水をを殿しを法のを六手
ゐ水をいを決やを殿やをん

是別なれハよく合点ゆき
ぬ人ハよほどくわしく拾遺
くるしからず候とも智恵
あらん者ハさとりあるべし
雨霧霜雪霞　如此漢字
よハ二句宛
去るなり
嵐ハ一年二句乃物と候ゆへ
新式の詞なれ排ハ嵐
二句まで也　山谷の嵐を
と詠るよりかくも二句まで可
候ハ又嵐山などいふの名所ハ
面をかへて二句乃外まで是
吹もけしきなとの詞を入
て風体ふあつくなるべき句
なりとも一座二句乃外也
きれ附たる物とて山颪風体の句
よめらむ也風乃字二句吹
乃字までの嵐　萩乃秋
扇子の風体乃詞ふいふとも
も嫌ふ句ハ次
鶉乃月　是ハ一鶉乃字今よし
て鶉附きの月今一
連ふ色てまいらし候ハあり
排ハ鶉乃字へくも二句可
有さ是一流鶉今よて今一句
と鶉と可付有けれハ月の比
残雪乃月遠きしの
鶉ふ秋ある月ふての鶉乃字
と鶉乃字今まて月今一まん
あるハ流れもやきを鶉へし
冬月迄なり

雅意（あさい）

良意（やい）　新古今

紅葉（もみぢ）

よいうんと殺のよいのくと只一瀑
白雪の義のうつる秋乃紅葉のうん
と殺のよいうんと義のうつる白紙
もれて義に紅葉　肌意
なるの紅葉とうへくこうへし
雅乃月のさゆるうちとうの雅
義あるく宮より別よあまりた
雅乃さゆるといくの白あるとも雅
乃月のさゆるあるもの不許者を
加る雅の紅葉てていさゆる
月と意月より雅し雅乃紅
のくの月のさゆるといくあ
雅義あるく雅のさゆるかな
可新意意より月紅乃意者
分ともあれたさあるの雅と意
さくや行きてくまるの雅
ましの秋乃さゆるとの紅色
ていの雅乃月雅と月ゆるとの
あるへうくの次とうくの月
意　只一具暁一瀑うへの暁二具
月　暁一杯と意うくのとの白
うくの意とと殺よるくの意
二白乃月のくと暁と秋とうの
あるの次乃義と只暁と時とに
もあるうも二白塗と時とに
とん紅時ふと時とうのみまの
次るよりの紅とと暁とくの
弥勒乃お世新乃下生とて
あるへくす

物風　只一物乃風一物ひの
物乃風と不及を代二用
謝よハ物乃風と物よ續く
ゆゑ

物乃歌　歌と云句ゆゑ歌きんあ
物を物よハ不可出者
あさかすけ　新式より雅二新
而より歌より雅
高わ院より物乃字ある物を
何の類ゆゑ雅ゆゑ
あとゆゑ物ゆゑ物
式より不審ゆゑ
あわゆゑ
[illegible]
ひゆゑ
乃不言わ通乃ゆゑ
のひゆゑ
物ゆゑ

遠恋　二謝よハ三あわ
星ゆゑ

夕明　遠より二あまゆゑ謝よ
ハ夕ゆゑ

[illegible]
蟬乃夕明落二句代用
焼物乃時ゆゑ不論ゆゑ
明乃ゆゑ二句連り題
加ゆゑ晨明ゆゑ
明乃字より
謝よハ三句ゆゑ

あるを不審がりけるにあしさいは
不審せし明乃おもむきハ題する之
今日非難ある明は月次の
月を二句あ題し題され月
ほかに名句あるを称し月に称
故に用ひ題にハ題のもと同じ
星にハ二句あるを
明る説
明ハ山の明を称せ
皆題にするに次
約河に多明ハ二句なり
明と題をおもしろくてと
明を称せし次ちれハ題の之の
明とうれも題して出られそ
三言相に明を題せし次とハ
て題するにおもしろき事
きハ明を称せしと言詞題には
あらさ題を称をかくしらふ
字をよくとしてや題には
あらとしん題義うれそ
称するに新式にさやうに
出典をも只明果く明るとくさ
計のさくとけうとおわやう
の義く明乃字題ゑとの事
さうる流字なれ尤されと
題ふに付くる詞なれ共題
ふなわるるに題さるうる
との人も題ふとの流とたる
理なきて无く流にたるの
とも字も人も題ふとのう
字ふとハ道理なる寸たる
字ともれ無く者ハ裏面の
相違されとも只あわやうに

梅をぬきて出陽りのとぬを
まぬかれ紋ひとつまん罪よ
ところちん次してくるかる
ときはりにかくはつてわめ
たとへ家の字之文同ことくは云
るにく枕書してくさても云よ
此類よ分ち此字やう着云て
被て二月及九月尽の日も
いさ陽日云起を夜きての気
まわりく云須よわし次云三月
猶二月もつと白数乃あら
ふ陽うらとわれと一秋の鳴る
鳴る夜と云よ八大きよりかる
このくくく別おきへし
鳴曙 新式よ打越可嫌 也乃所よく花也
是ハ曙と云字一字ある故よ
明乃字よ打越を嫌して云也
なわあ字末の乃もの乃字と
皆都之と云鶴也事文ハ
ホハ二句嫌へし明ゆく鶴
離之嶋鳥くハ都の次あし次
都のよあし次をり入ちの乃字
ハ鶴河よ文字よハ打越を
嫌し云り
鳴蓄よ 鶴河よ文河よ都よ
乃字よよ鶴乃字 蓄乃字よ
文の字よとも二句さり也
あくなよ あきよ きさく次 あさ
二句云 なり

[illegible]の字は書乃字二句をもしもしらにあり
さらすあまをくれのくれ
あけぐれと　ふ一度くらくもの時ふ
成まもあらまし無分し物時ふ
よ二句　又時ふよい不論ひ
時をくらみ字とあらるるわ
明の字よいこ句書の字よ
ちこ不論くらきまよられも二
句と作まとそれ当紙
事ふくらきと書と又字
別と結よあけぐれハ書乃
字よて論乃ひ物
ひかよ此物　毎物句
此物ふ書ふ物ふ
ふ書さ

[illegible]一　ふ
謝よハ早且物且
今且と物ふ乃門今一物ふ三
句あるこもいくあるひよ物と論
なわあさの字よハ七句ふし
天乃字　物よ一物ふあわく
謝よハてんと物ふ一二あれハ
あさよ面とも物ふ物ふ論ふ物
乃物し　あめ　あ面　てんのつま
も面と論し　天よ　あまの川
銀河とうけ　も面ときてふ
よ句云ふるとふ連歌よ云あ
う物ふくまと作ふ　ふやうの書者

乃文字と為るべく去頃もてえ
さうなりものこゝおもあく指合津
海面色々千年天満川の
うさゝわくいうやうもうるさやう
あわた空乃赤ゝいろいろ
瀧よりあゝしゝ色ゝ文句の間
よへ色々しゝ七夕の事なれハ
菊ふしゝ天上乃事なれて
水色よハあゝ涼ゝ風ゝ
赤橋と結ひくゝも非為色
河間乃天河なゝハ新ふよりも
殺生水色しゝ七夕乃
仙あるゝ句なゝ新ふるゝ
しゝゝれゝくゝも水色ハのゝ
色ゝゝ涼あゝ赤てん
色の字よ色ハ二句さゝし
新式よ行り瀧流よハ二句新
紅めるれゝ義別とあるゝ
あゝゝへゝ赤めゝ河ゝ風
海色二月乃色おゝ
あゝゝ云よハ二句去へし赤天
大色ゝゝのおゝれゝこゝち
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ地ゝよ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の字ゝゝも天乃字よゝ
し瀧よハゝゝゝ吹味ゝ
ゝうのゝよハ面ゝゝゝ
ゝ涼ゝゝせあゝゝ文句ハ
色ゝとハ行ゝゝれゝゝゝ
成九ゝ字色ゝ事よゝ
されゝ其座乃字面涼よ
し行へゝ文色ハ天乃字声

に讓くも二句去べし 但天象
天皇 天関なしくの天にハ付
てハくるしからず次天人天乃
なとの字の事をといひぬる天
乃字にハ字皆二句去
わら鶴の里 去る霞ありハ
杉と鷺擬よ
る踊子十六 女踊なるの
公夏根元 年中行事ゐるよ
くわし

曙

日 非ハ一座二句あり曙雲
るとも数よりひくも二句の
間を置くし鶴啼あまを撥し
曙よみのくのかのをるとし二
句嫌ふ

鶴日山

啼かよきとくわ
句嫌よ可あし 天象よきをくも次
芦 水辺之植物也雑也芦火
植よある名 非水辺 執ふし 非植物
詞をいひまを植物 水辺よ二
句の芦の植物も嫌ふなり

世芦

田西鶴 水辺よも植物よ
もかく次句をえし
嫌よ同し
鴨 水辺也名也植物よ
芦ハあく次えまた句嫌よ
よわく植物よ二句也あし田鶴
嫌よわく植物よ二句あわ
あし田鶴 芦鴨 方道大

事の秘伝あり連よりあう
よりひとくさ葉乃字一種は
三句あり雖よいろと数よ
ゝ今一句を入へし清新と
なく心二句乃相しみん家
乃葉乃字をもちいたる
連よりも劣ふ雖ふしも句乃およ
面をもへ今一句あるへさ
ゝ雖葉乃字と雖よりもこ
句句ゝ葉乃字のよい不可
有

温日与 日乃あたゝ
可為二句し新式也
といふ説よ
まつ小塚 二句もし

まつ井 井乃字の
雖二句もし字二句もし
字の通乃大秘ゝ
ふもゝ雖ゝ
ゝ二句もしゝ
乃ゝ
清滝 山滝家滝の外貴
乃滝 文字連よ文句
なれを雖よ三句もし乃
字よりハ二句もし文通乃字
もり安よりあゝ俗中通
実和 通字家 為異なの
数よりゝ時ゝ分ゝ
ゝ雖数よりゝ海ゝ
切字の乃字みるわゝ

清瀧よりは不遠因幡の岑
山もとのうらのんの清瀧
と云名はあるまでもなく云
詞をこうわかりの
あらし吹清瀧山 國歌名
まで山歌よりは後世
四
あしの海の
乃今案に不
雖とあるは紙背相の説
なりくをは式部二句始
九おもくへくあるとあしの海と
云字は荒磯と書と荒の字
むかしくきかれよ續とうく
勇の出るとは清泉なれば右
を代乃人まのなのあるの
ありよりあしの海
あしの海をとは肖の字乃
仮名なり荒乃字乃仮名
ひおしこの須しなくは文
まるを結るは書るもも
あわもは續るとうくの字を
もよりさてはすの字を
いとくく肖よりこの結の
字のまま守よ始へなりは
をいまのしらませるこうり
付くの仮名は筆乃書
この今まもは仮よりうく会
はよりへは事をんはうく
とりの説しは清泉よりまるを

驕奢せんとこそ調ふるなれハ
其の字の心を第一とし安楽
丸く肖物の合楽よ心を合
得まして何くもなるしかるへ
からすとも殊とるへ当世が通よ
其の字の道理あるとも二句
嬉きを附合して其理なくハ不
竹籠
東路よ　東屋四阿とも云
連りても難しとも称とも極るへし
文字ハかゝる稀成も
おのれの字東屋とかくとも
連よ二句乃内よも附とみえん
通り難よハおのれかしきをと
云ふ事今一のくこ句あるへ
き次又おのれよおのれ称ある
嬉かたしおのれしく物も二
正しと竹籠難よ東国四阿
坂東ともいふ数よも是あのれ
ともおのれよも称と竹籠へし
おのれの文字数よ讀くとも
おのれハあるへくる次おのれ
おのれしと讀数の附合四句
称いあるへきなおのれしく
おのれしくとくと云字くハ
不肖肖内二句ハ附よ成きと
久く事さる難のきくハ
極りも文東大地東海朔東
豈よしの字ハおのれよ二句
嬉へしおのれやおのれ称ひ
等乃和歌よも附くもある
しのへ候それも又おのれよ

[illegible]

つまり京都[illegible]の弱くあんをの人
乃尋用はさそ所白けまい
其こうこうとの酔醒を
組抜合はあくこうとを紙を白
汁漏くこと不可申者

あみまの

紙漉出れば
はかみ紙を編木し
若仮くも二白をいはまこも
付くくいくうるくあくこ

紙

字をし組ぬ乃数い連は
わをを紙漉はを面ををしをい
居ぬ乃ぬ事をたさ巻
乃あくるしはをのあくし
[illegible]

雲

只一雲をつを一雲
[illegible]

あくをみあわ皆わとを
なわあくを池乃綿雲釜
餅のあくを皆離みわ

網代

みをしあを通し生類は
あくあをみと紙を編網代をを
水魚をを掛乃事しを
紙は抜しあくは連はわを
きくへし漉は面を場し
きあ乃をは月代當代ぬに
わを編り編を編は編を白
きくへし網代あは二白編木
網代屏風網代の輿網代車
あ巡はあくす雅を生類
まをきくを次をの網代は
わをくへくを今つを民

個武乃原居家より二句し

鳴石 鶴の名なれば名づけし

赤乃宮より西と遠明の

宮より八町くさらう沒

加八石乃宮より西と遠明の

宮と鳴しく高ノ高ノ高ノ高ノ

年ふるも高ノ高ノ高ノ高ノ

たかれしかの高ノ高ノ高ノ

鶴なる高ノ高ノ高ノ高ノ

よ貌なる名なれば石乃宮

おりなる加ノ高ノ高ノ高ノ

岩より八七句なる高ノ高ノ

句ノ組ノ高ノ高ノ高ノ高ノ

姫義なる高ノ高ノ高ノ高ノ

くしよりの高ノ高ノ高ノ高ノ

計姫なる高ノ高ノ高ノ高ノ

いよ句まつ物うへ二句きく可

弦なる加ノ高ノ高ノ高ノ

なる鶴湾しわくなくなの

真なるなる加ノ高ノ高ノ

器なる迫よりあくよ山鶴く

浅間 ゆくなる加ノ高ノ高ノ

鶴石 毒くなる月十日除月

乃まくく

新 高くなる高ノ高ノ高ノ

新 加ち鶴ハ姫く鶴ハ高ノ

毒く千鶴ノ高ノ高ノ高ノ

連より二ノ高ノ高ノ高ノ

毒成久ノ高ノ高ノ高ノ

鶴のなくの高ノ高ノ高ノ

ノとなく

新古衣

物しセヌの異るら
朗詠乃詩よ云衣
雲流ととあるもの物語
乃ちもちもセヌのもし
扇なく紙漆たち風俗と嫌と
よ云衣を不曾者のくく風
乃風ちくへ同きふ故と扇を
衣のまと物よちく風俗
嫌ととやせ扇を又徒を
ちちくく物はやせい風と同
きこちは風も又きこ次を
衣乃物よあ云可嫌 紙
又漆をちちるへちもと古
人知あれた衣の新すく
ちよちくく人扇を重ら
物と但句徒く新式よあれた
句徒を中ちもちち道志代
よちちるよ加浄瑠璃お来ちる
乃重と云白ちへ句中ふあれ
も当物よもちちち会ち
又扇ちこ種よ行句の物と
衣物式よ云可加ち
郡ちへ扇一へ物ち一も扇
乃夫名たち扇を又物ちと
と楚よつのくく一ふ白物を
毎ちくこあちへしちへ物
夫名ちくへ扇二もある
扇絹も二乃用と地制月
ちくへちちちちち扇いちく
面ちち園乃ちも未ひちち

かうき歌世に其の名の扇
は彩雲の類にてはかりの之
ふハかりき蝙蝠乃形と作き
あり摘たる扇乃名の所を
生類よおもく次に雲蝙蝠
とミ句わうれ名の扇あり
よおもへれとも又ハかり
命うつ次画んぬるてうと数
きらん皆圓とさ所よしん扇
乃扇ある人し班女か圓れ扇
也し圓扇ときこえぬ扇二
ありま圓扇と云又ありうし
圓扇とるをくうらんた之
わるこまれとうちくと二句
乃摘も扇をミ句乃摘もわ
扇と圓恨む詠みし閨成扇よ
折をきしぬとつへしも扇
三乃外よ圓二あまてし面と色
色し圓も夜と納涼たる風
様よきうら次動くまれを
物之絶無扇わくさ無圓不堪
其折乃字摘の字付句妙之
圓扇と数多よ之所を甚しく
又しつら次
鶴髪秋之ミしま鶴とやそ
わした鶴字とさもしき
鶴さしし皆ハ滑走も多くし
遠雷ゆり扇のもおへさと家
しゆりおもしあともあわく
云ミ掛てあくも富ハ滑よし
てもみつし物宮之山おね雲
こそれ乃滑し皆みてそくれ

霜も同じくいへりまぎらハし
雪といへバ薄花(?)くもりけれ
立とある雪猶るるに准し
云ある浅芽を春よりのくすすき
各字様よりもすすきあるに
雅をとろきてへしうす雪も
同じ事也うす雪そろへ雪ふ
ハ浅く世ハ春に随ひ
あさち
浅茅　雑也浅茅生ハ春にも
二句たるべし雑にも
ちらさ二種あり一ハ茅草一
ハ千種にもある茅乃字と
くハそのしの種をしる草を
も些ましよ二乃ハあらゆる草
とくハ万乃草段折くちき種と
出ハ第よおしく次を随乃
ちくさといふ茅ハ冬にいるめ
なる種のちらさるしハ種類
茅ハや薄ハわかしく次六草と
ごとし久しる頃よりやとく
種ありよありちくしも雑るり
又茅くしやうの試云くもいひ
あかれしちやハ秋冬にし
まれも粽とよし非種物一端よ
用取夜よ成て根ある茅乃葉
そちへくきを結ろう取捨て
まづ是もちまきことにきられ
茅のはをさハ二句可遊歌仙
よハちまきハ一ち海な杖一ちまき
な種ハうらひ物よおく次之まき
まも草よ為川取れとハ延
のちまきのとく事くなと粽

ともしく今一句あるべし
哥の婦様拠をも清撥して
場弥韻の人は越すまじき
は花春之季語なれは慎むべし
華の字韻によりて又く是は
一句あるべし新式にこれをきらふ
言葉山をば殊に嫌らふ次第同
は歯用の字をのぞけり
定句の物とす
槿 小 錦乃字あるて不嫌と
共 いつも新式に不庶象
乃よしあれも二句嫌ふとさく
申されぬの字を用ゐおわしたの
うかはるらぬ新しうる句こしは
めぐる乃字共をも可嫌よし也
小路清わりとよ不及其くわ
おきうてお錦乃字よ二句嫌
上以弓前張同く端よ花乃字
きらるぬよ槿錦の字不庶象
乃花の外余花芸端ある花る
又時も一切の樹類を是ら名し
ていひ槿ハ花ならおしたむ
向くのらこ名るれを二句嫌
まじきるわとよろべし
海士小舟泊瀬山 両乃字
小可嫌く新式ぬけりなれを浦
小舟之の乃月と云ひ枕詞も水
辺よて嫌之
東遊（あつまあそび） 神社あるくまじきなれハ
神祇ナたるべし

温　日のあたるなかい可居
まさらく形式ものしのを
ふるを只あたらなかいとらふ
ふるわるを雑しとゝんを意こ
物よあたらとゝ湯いとし
るへくまさよ所といらを以
元程成汲清し綿衾人のこと
へ欲物ないものとにあたこの
あ所とゝ湯ちを不断ものを
ちをまさ一宮ちもいたれを
形式よ日の暖なるとゝふ
あく雑分ものもれを世とり
暖氣るをまさ宮ちを
ちれこた氣ら風水世上野
山るのあたら所ちまさら
湯系肌る見袋ゆけ
るの温い雑ものもより
顕然ものは連りはくもものくも
さちを物へ郷よは形式乃古法
可用ゝ欲あたるもちを同お
湯をあたもちは物し温なる
日とゝ宗二分ゝ形式ん
お紙をきたる毎角る把の所よ
温日小ゝ宗源よ冷宮ま
冷分よゝもよ意ゝ此ゝ
昔ゝまを物ちゝ氣の湯
くゝあたお紙をきたる
ゆ今は温日よゝ宗ゝを
きたる毎よあたる欲暑源冷分
あもゝ毎し行ものも二日
ゝと連郷ゝ人ゝあり

新式の室を造ハいとれと
とらへるところ数十年ハ
暖をれまこ和ゆ寒を計と
暖もとらぬ風うに成来り
ゆるさ海ちくちくこの
分ハ一面郷しも寒ゆり
長き庭乃家函次第小海法
せらるへなゆ九ゆくくを
分制を所よを成乃法を
寒程し新式の室乃ちくく温
日よ室家とうをを二句暖い
高暑寒を原ふの湯をい
きうるぬゆ結しをよをを
法よ深さるこの新し寒
源温熱四室の氣乃ゆり
風ハ者ちを乃事なりを温
新しく暖うんのうちまゆく
云よ社ゆくとを云ゆも清ゆ暖ゆ
新式乃きうハ風よハ風をを
をい海ゆ暖ゆ日乃温なゆ
とを室る所と風をなわ
室をを冷しなよ分ハむ
ひやくゆな深も清風をて
を室るゆよ暑をきをを深
なふかん新ゆを者くの新し
きうゆをうハををうを深さ
分れハ通理を矣新一面
云れ文よゆる一ゆ奇を小の
風ゆも深しなよ暑と付き
も風をこの風うよおもゆれ
と文ま風をこよあ深しな
ゆをよ文とゆ乃ゆ和ある

こと国遠一にハ偏き涼に暑
き裏表乃国々隣ハ異な
白熱に至る也木雑木乃影をか
経可け依る寄せしきさへかゝる
たけくうき河に浅へし流
涼に冷いぬけれひやゝおわ田を
き海しかよ爰かあらしむれ
涼しさの深成る別乃気よ
なれあれた国ミにハたより
さかへしらくみ別をたへし只
武国乃為を海ともかく末代
乃界にまよもそれ也ほ
まよあくるとも為文見し
あるへし　いへし人倫なれわ
　無き輪ふおりき
雅人倫随成乃花を
あるし月をあるし人倫
ふかくず花をも友月を
友同ふ花乃あるし月の友
謡句禅て為人倫花乃友月
乃友ともいハ花のあん月見の所の
友そさし人倫なれわあるしに
良の字二句とも

秋乃田

稲穂に打越を定め
稲乃中に稲乃田ふとく
くるわ書くる打越とよへ
治定しくそけりとも代穂
稲よ不通ともしく云々
あくふも非二穂稲と定て
きんをも稲をふも河に稲に
稲田乃中の田に為乃穂と加くハ
穂稲に一句不可穂へく兼述を

おもしろ可申歟とくしもろひ文まの
乃四を名遠へあつ之くしろ
新式のんを田ハ雑なる物乃
四しんうく面物乃事のになるも
乃廉なと之面しと結ひのくハ
稲稲よりすしとそれまもこそれ
も廉と長つるとあらハ稲稲と
と云文まし物ぬん面とハなけ
主と廉乃なくなまてを事
を物乃田しいみ云ハ物乃田
と云ハよ乃廉なを結へくも
稲稲よあしとと義程ハ
あしとしくくしくくしくくしけ結
あさつくい
名乃月

名月日　名月日　月日

日月名乃日しと有狩の張もの
しとしく名附日しくしくと新式
かしたを云云附乃名と云た
ろ乃しく月よハあしと名乃日
名乃日しとを抗をしろを世ぬん
人撥しとのくを名ふ
月ハ不論く書くしろ新式
乃ハ云いしく論を知しろ
しとよ云有しく無名花を知
名ろ遠稲ハ月日よなを
論しくとハ文よあしハ附乃
字と書ものハ鑑ハ万葉集
しよしくぬひ乃浦しとと云ま
白浦としくあしろ綾の
字よんしく附乃字も国く
名乃月日と云ハ名乃日ハあしろ

ひとの月の強くうとうの
ふかまりくる頃の月日をう
ひの暮るゝ程迄なほ
月日の二義くれ行ものとゝ
事ゝ月日も同じくうつれ
ゝ雖ども月日の月日の
ものも日の月日なるもこゝ
ろ月日清秋よ
なりくる面の月とゝもに
況し新しのあへりゝ
秋ゝ 句ゝ

菖蒲 あやめ

花も菖の菖蒲の興も皆
乃ま人ゝ雖ども月日の
あるゝ

滝 あさき

ゝ山影も
ゝ

天鼠 あまのそ

天鼠の物 句ゝ

郭代
あるゝ
句ゝ

天河乃の郷 句ゝ

結ひくも雖ども迄七夕
天河乃の面
もい水邊ゝ雖ども句
ゝ可ゝ

出羽天乃字乃きてゝ[illegible]
なわ浦海と称のよう侍句
あるゝて天乃字よい不絶紙
とゝ字ようハ極へなたりわ名所
乃河を紙乃字と云書へゝ次
玉乃海 名所ゝ国乃名ホも
いきゝ海おの海
いけも国ゝ国の名ホも名
所ホも鄙よハ三句侍ゝ
霧津乃原 霧津の森霧津
乃里皆水色ゝ
ゝ次国ゝ霧津と称ゝ
過次 名所句海ゝ也や又同
ゝれゝ大津も也次名
国ゝ津乃字海よ付ゝ
文字乃津奥乃乃金津ゝ
乃仮津奥乃乃名津
郡の名ホゝ
よゝゝ称ゝ
海辺

亀坂 山類ゝ関も山ゝ
ゝ山類ゝ
合亀ゝ云紙ゝ亀乃字
二句云仮ゝ
ゝ熟語王乃字
葛ホゝ
日和よホゝ
云乃ゝ合亀の二字よハ三句
ゝ次も
緑乃葉 ゝ他乃ゝきの葉
ゝ乃ゝ
字ゝ二句侍ゝ

秋乃源　業の仁　秋のあつさ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
海士の[illegible]　火よ焼て
[illegible]　あま須縄
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゝ也碧乃字はれうとゝ
字ゝ曾ゝ字ゝゝゝ人ゝ
相ゝれうゝ

あゝゝわゝ　外ゝゝわ野人山亀
　　亀去ゝと亀（きんて）亀去ゝと亀

よ二句ゝゝゝ

きてあるこあるこひ木のもふ
よこ月をひあるこひまのへを
云白ハ字もんもあるれをかるる
ときこ海こんを亡ひ亡ひこ次
海士 人海こを西たわ

白馬乃長命 ひ月ちも

鶴鶴の毛 鶴たられを陸
みるふをるわ

汗 をを物よ夜の鶴よ出せわ
鶴式をんもるを汗ハ夜
ようきこんを病よも又鶴をとり
さくもおりを鶴ををらくも
あるをとしくも湯茶を
或病よ汗と汗ハ雑なり汗わ
ををもれを夜ハ汗ハ夜
今出へをもう者のこう次をわ
鶴ふ病のわをを暑のかを
ををとこ次をを傷をを
を病をを寒ををうんしくを云
おこうとのこうさあくハを云りく
出へを云紀を温病こいひ夜
も蛛も名ハうこれをも熟
病者皆傷をを暑をを向ふれ
ををををこをりこ霍乱を
夜を河をも他ハ手をふを
ありをれを乳中をを
乃外ハををを寸暑乳のか
を熟ををををくも夜たを
毒こ次をふを夜ををこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

龍潭乃傘

九

八月毎一　梅乃毎一一産二句
（乃梅ゝ一おせるゝ）
謝よい八月毎一さ月乃毎と
りゝゝゝゝ梅乃毎とり今一ひ
かよ梅乃毎とりゝゝとりゝ
教ゝいひくゝゝと三句ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ梅とゝ一ゝ
さ月毎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て耳よゝ毎ゝ作ゝゝゝゝゝゝ
懐ゝとゝくゝもゝゝゝゝゝゝ
句ゝゝ歌組八月毎二ゝゝゝゝ
ゝ乃句ゝれ句ゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

猿 共一面ニ[illegible]ら一疋ニ[illegible]数[illegible]
猿[illegible]と[illegible]

[illegible]

[illegible]

と一ぬ楊よりあらへ[illegible]
[illegible]
[illegible]

大藥酒はもくるとしくるさ
みよゆちん大橘のくゝ海と
乃橘乃屋うゝおゆ月しまてう
傷う笑ん歩るゆしゆ俗類の
ゆよ山陰よ屋さくくうゝつう
大橘屋くゝ和れくゝ人も屋
ゆいあまくく謝えふいあくく
ゆへくれ丸壓ゆしゆよ流よゆみくる
祝るれし謝云よ脇屋

橘人　橘田耳ゆ種物新式ゆ
ひ橘人くゝ潤物の名し
屋くく新式の宮くくのくくゆ
しくゝの市ゆ紙しゆ丸繪にゆ
第耳ゆ流くく種祝ふいあくく
くゆ屋くくひ橘人橘田と種
ゆゆと花くゆ田ありと云へ
不審ゆゆ丸謝よいくゝ分う
くくへくくゝ物よい種祝う
ゆゆとゆ耳丸既よ新式よ
種祝ゆくゆと汎くゝ上ハ余の
催馬ゆゆくゆゆ脇へくくゝ種祝う
三白ゆくくも脇へくくゝ成へくくゝ物よ
くくくゝゆくゆ名よ義ゆくくゝ
人橘よゆくくすくくゝ宮ゆ新式
乃種祝ゆゆくくゝ丸ゆくゝ人橘
ゆも橘へくくゝひ橘人橘田よ分
てハ移くくゆ云くくゝ橘人くくゝ
くゝ宮よゆのくゝ次

橘田　ゆくくゝ種祝し田うハ
くゝ云ゆくゆ

橘田中納言橘乃馬潤橘の文

[illegible]の名所なり雜し種稻小二百
[illegible]

播戸（ど）　まき[illegible]種稻し居所なるわ

播鯛（さらさらだい）　播乃江なるふこわく[illegible]
なわ種稻よあるこ所

乃流し播貝も同名

播麻（わさ）　種稻よあるこ次[illegible]

播乃鱧（ぐん）　雜なわ種稻よあるこ次

播る（ご）　人倫し雜なるもの播川
と云所よりこの名

なわ種稻よあるこ次

播川　雜しる迫なるわ[illegible]
種稻よあるこ次

播井　名所
あるこ名所乃時の水田之
種稻よあるこ次人名宮乃
河なる水田よあるこ次同云播町
播乃なる湯なる種稻よ二百所
て播川播井と種稻なり不足
[illegible]名所播町なる祐
名所よあるこ次平名所よるし
あるこ次[illegible]播と好く稻ら
[illegible]中納言の名[illegible]
名所の屋[illegible]播
乃なる[illegible]
位[illegible]馬播と[illegible]
播なる種なる[illegible]
まく[illegible]
[illegible]

う梅もまたそうこうふかしう二
句とかいこうてうるるもう梅川で
ちこ流れんかさ名ふるれて
いうは因縁ふくはうら義を
不知風きはたちさんこうあつさ
殘毒はうち梅井因あ又同梅
乃こうこうは梅はいはいは腐の
宋社乃名くこうつく梅いとい
梅ふうは因ふこうこうはまつて
神木てあうあくはは名物へ
小盤庭よ因梅はは毒

梅かさ〇　まこと

寒　さむさ

寒はあり名さしさゆうも同一連ち
さむさなこうちとこうさくこ
寒はありあるはんとはのく今
一ちうちこうれもあるこうはの
さゆうんんとふこうこうこうこ
さ梅ふうんはこの梅いはうへ
こうも因寒ふうは同一ちはよう
乃ふふこうは梅はいはうは梅はは絶
乃こうは裏はあるはべたうへは
こうこうこうこうこうこうのあるこ裏
はは裏乃こうはこうはこうはこうこ
不可有はは梅はこのこうこうこ
可有ふんはのこうは因あ絶こう
はこうこ裏こうは絶乃こうはあ
もこうはこうはこうは不可有こう
こうこう裏こうはこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新式乃昔をゝもこゝろひて
新式の段乃連歌のさゝめ
ゆうし丸うと業者あ乃
宮乃部乃あゝうゝ和うと云
詞乃下よりゝゝ注へ
藤乃庵 種柏よりゝ次ニハ
藤と印くゝ乃
庵乃ゝ
さゝ柏 種柏ゝ和ゝ
旅ゝ わゝ次
さゝめ 藤よりゝゝ
藤乃ゝ 四面を廻へ
藤と志乃 新式ゝのゝ
謝ゝ八七句ゝ
四ゝ山決乃 藤乃ゝ
ゝ藤乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ八三句ゝ
ゝ行ゝ
ゝ八ゝ
ゝ行ゝ
ゝ新式ゝ
ゝ面と廻と志ゝ
ゝ乃ゝ
ゝ一ゝ
ゝ連ゝ
ゝの
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

馬示より行くて一切の業障
乃名の業未は種種よりあら
次業成を拾し覆る親示
乃法鳥生類皆業成は拾
業生類よりはるし次同云
種を催馬示の伊勢神海
郡波濤の示を水色はるること
次業云新式より業示の業を
を拾く種種よりあらはも
海より示はるる業示より業
を上る伊勢の海とあり
を為迦よりは波色るるすと
知へし但神示よりいらくへ
きらくをとうしとあるを
拾わもるるし次生類わもる
皆名の業の業示を波色わくすを
業神示るるを波色わくすを
も変しる迦わもなし波色
拾合乃くらるるる濤の業波
乃あるくるれを新式すも只
大綱をあけく綱目をるる
次未代乃宗通言学の
おしくは光明より波るるを
きのし

伊保姫の夜

夜類よあるるは非夜類新式より
よさは姫を乃拾るるこはを
云流を主系よりはわしる
と光姫乃濤波をる人るけ
業を四合主もそれるる

[illegible]
おもに名所よりはじめとりて
あり元辭事歌新式
のをなる義とあまたし新式よ
名神非名所名所を云義理を
しりてとるひく義日代神
位名の神のことと紀也の時よ
り名所よせうるくしわう
位うの俗世神事歌古人のい
神をとる歌うくいはくもも
現しなへも初結中所
新勅撰よりはじめ
ありて只神の法名よ
てして俗事名所二所名
乃程をしと神道をしくん
[illegible]
位名の神乃法名のうハ法
と中はくを座はくとるを
事所勅撰と推量せう
出しもしもあくもあくの義理
なわそれハ名所ふへる
今ハ新しるとるにく
新式よ名神非名所ふ事
をや伝保法ち面法ちハ
唐よハ道化乃神と名く
義秋乃花紅葉を法り和
歌神をとるを日本よハ義
乃道化の神とハひめと
ひ物乃をハ面法とる
ふ法と神祇神紙よハせる
ち伝保法ち名ちわ

わく長崎なる行事とも姫と
云り嘗のあるやうふ句と
作りまく云ふ云しかのうも續た
実祈ふきかよ衣類よさへきら
るる程をもうんそ名不りう
きこ無名なるやゝ九り男成んよ
文候と云ねる智恵わらん
人ち宮こ後生よ多うへ
なとこそ名ひ作主作保と
云と作保の山形と云義を
西行とそんさこうくう云ゆん
神とこりて云いと義わく云
云口傳のよあるく

さ絵 さ絵しうるよ小松
小藤のかなが付句と
きこ無名紙不書く

さうかう 連よ六句浦よ三句
をとく句のと
六男の宮ふ
塩云しうも宮こさたもとたる不
宮こそ小乃宮るれをの宮へ
小の宮よあ云ふ

鶴 非水鳥白鷺と雖と鶴るるく
白鷺と数よ使くふあ
鶴山和歌よ云ふるとあり
も鶴るれて物と書くふ
あるへ鶴よこくるとる句
云ふ云ふるよ者あるれた白鷺
宮よ七句云へ云へ云鷺
六作鷺宮云ふ物を
可出云かこくふ鳥のもる
書く鷺よ句可出云作源

民の宮居の考へ
とかゝるよとゝ
可依句絶なり

西乃ひろわ

よ二句可山畑
空新式もしあくあの月を
拾し新式と云西より二句し
酒之乃門
酒之乃

坂

今一名阪
非山新名新の拾られ
付くもくるゝ
坂山新
乃云坂之乃門
乃元の坂を山新し非迷懐
迷懐小わ
之乃門と云の坂門云乃
乃を拾し

横乃宮 風乃文伊勢の末社
なり名家よりし
連よ云てわ

咲

と云字連
ゆせハ雛
主も本草の
あるまゝ正
花を花の咲
くもの開の
ハ雛の
字咲乃字開の字なとと云
ものひゝ
戸物文乃開と云面を焼へ
欠ひゝ
詞を拾られハ

新式より八月ごろ称せ初めて一
名ありとあるべし家詞とも云ふ
なり

又蔦　又こゝ極楽寺の西より
あらい沢

渡　只一名にて一郷より沢二名
而より一郷とこゝ山沢なり殺
より濃くもこの間こゝ沢山そ
山沢と同字なれども山の多き
をこゝ沢の多きこゝ極の多き
ふもあれども山沢もあれども
外こゝ沢こゝ山乃字沢乃字
二句濃くこゝ
こゝ山乃字ふの字より
さ山は付句なれば和へし

ちく波や大津の宮　なく秋
ともあれこゝなり　沢なり
さゝ神石　所生萩　こゝ雲
二句きこゝ沢なり
さ歌枕　あるあけぬ
付句こゝ沢こゝ山乃
よ所角　こゝ沢句稚
指乃字　句こゝ月日濃秋ふ皆二
文よりこゝ句こゝ沢こゝ沢より
きこゝ枕へ文　こゝ沢こゝ句濃
里の河月　河波の角而こゝ
こゝ沢こゝ非沢

而非人倫但逼蛾沒をわく
河を加へる事句をしる人倫
よ成角しく人倫よたちくも
名所のい海へなこ入いく
の里の海士をしるをわく云
白い名所よあらぬ所をもん
名別方もしよしろ人家く

酒 ちく震酔竹葉酔を
酒をもしる又面をしは肉う
あるへしくのちくいひ面ち
類大略二本ち謝ヨハひ和よ
ちゐと殺よ漢をけをしじ
酔狂わるもこそれをこう
よそへ今一あり面一盃ち三
度酒乃白いあるの月ちあそ
ちわせうの美名も
山間と初命しはおを塩へ

さ月 ちる月
月長月 月長月ふもわるち
もるををさ月とはあく
晨明をを白塩へをいそれ色
さ月面の月をもをる寸歌
ちふも天象ふもあく所を
明はきるる無さ道理をし
る月月の美名をれをるう
乃月次長月ハ二句の和ち
塩角ちす

さもしろ小 国歌をの波法二句塩
角しろ無ちる物ち
必ひるもし文よ仏的ちく
さしるる句ち神のを文

物しるの用の酢のさまざまの物
をけまをいたれば酒をもよ
物とさむるまよ二句墨とゝ義を
ゝ空てく用ゝ義かの事加へ
し国番の名ゝれと和
分をゝよゝ称文字ゝ
付くめ浅さ海を義をさ海
を形とよ二句墨とゝ加へし

同のさまゝ

三陸よ同眼雲よ耳口よ
まのゝ天春ゝまさよ
ゝ同ゝゝ沖ゝ振よおく
沖端醤ゝ名陸ゝ
ゝ米事おく付ゝ
ゝ陸ゝ例ゝ新武ゝ
海陸ゝ記ゝ古人作
等付来と義作ゝ但ゝと
云よ視親ゝ義乃ゝりめお
つ必同ゝきゝすのおく月
ゝまゝわゝゆみも耳ゝさ
和尚鼻のきくゝゝも
口乃きくゝゝも見乃
きくゝゝも物みのきくと
云事もおも八同ゝ月の字
耳小同の字を若ゝ不福
欲ゝゝよゆゝさ八力ゝ沖陸
ゝ作くゝ毎ゝ風ゝ吹ゝし
の紙も可止付ゝ後生小鼠ひを
毎度毎ゝ九作くゝとあ
ゝ同ゝゝ乃字も耳ゝ

乃字も唖と書くなり
若若なるべし人をいふ
毒薬をいふ
目あくこなり
付くもくるしう
口ときく者をいふ
く目のきくなり
きるの目のなり
付くもくるしう
目あくこなり
字は眼目なり
きく所の字は耳なり
可付は深くく別せら
るべきもしこ物なるべ
りあくく目のさしつ
弱所也
もつを指をいふ目なり
こをいふ目も
を唖の絶とくくめり
字を面とめ
くくみ義とこなり
付くこくく見べき所
後の目なこなり
若若乃目者前乃字
すハ目なこ
字も同
さく字 後まこのさ
乃数二句唖
乃字も唖あ
乃字二句唖

さいはひ

組紙と云ふ

さいはひ　なを云詞百餘よ二百許
ある人しと云物よ行り
元い上人家々ちらい活次文よ
年よを詞ふもあるべいめ
りくもせくいりの詞を取てふを
いの詞と連よいらも通音雅よ
二句まよもへなかわ

さらの字　あるさらい加乃
字を出るり雅

字ふも文の字ふも二句通と
いり事の字よハ不通注元
も付句ちわハ通へき次雅文
と云詞ちわたいひて真
中よ別しくぬきわくちら
ひまり鏡てあるさらい濁
字あくいを付事も唐れ文
事の内よ屋ちけ面詞を
付り時不よちわくらい沙
ひ人ちもあわ作れんな
と付ちり計もちまてちもの
字方文の字みわも矣の字ち
も雅の字ちもなるもなる
さらいさのちらあれもも
ふハ通ちなわ

所重　表されり物を重みされ
ダ文雅ち雅所重と表ちわく文
さ雅雅所重と表事ハ字ふも
ある人ちべ元ハ口傳の雅よ
て出あちり事事ち只云
ちれと秋句重ハ字ちと詞と四

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きのふ　只一時ばかりとはいふ
よはきのふ一刻をもいふ謝
と又一あらはしあらはしあらはしに
あらはしあらはしは日と数なれども不
有ふる日計りも同
明日の憂ふるのふ称なる
明日　明日は憂しと入れり
行ふを憂ふるふ
成し

徳　只一謝よりは特夜と一ふ
おの徳乃句は書数墨書
利ふるふ字結ふ
乃句よりふ字を結ふ
擬ふと数よりふ
徳ふ数二句きふ
の字より三句ふ
字より句ふ
徳ふ
付ふ
をきぬふ
乃句ふ
きふの字より
ふより
でもふ
のふ
雅ふ数
小書より
逝を下
を代ふ

毛八丈帷暁起るゝ時
なるゝめんくの衣雲衣とと
つまさぶらわ別まきの長九
とんゝ毛りゝ紙まき花別の名
ふ宮わゝ所上ゝ袴ゝりん
や衣数よいる所まゝ宮
と浦宮しゝく衣紙よあゝ浦
と古人の浦浦しゝ袴まき
るれも鄰まゝ式目を寄わく
衣数よい不午歯白宮衣紙
の二句浦ゝさゝ毛ゝんゝ句め
よい鄰敵ゝゝ人ゝ紙をき
袴ゝ事ゝいゝゝ人ゝゝ浦衣
宮よいさゝと同宮ゝれも
二句毛ゝ袴ゝ連よいゝ雑一
句句毛ゝ毛ゝ連ゝ鄰よい紙
句ゝ事ゝゝゝ袴ゝゝゝ
ゝゝ宮よゝゝ袴ゝ毛ゝゝ
ぬゝゝゝゝゝ一句ゝゝゝ
別きの宮ゝゝゝ毛ゝゝゝ
句ゝ毛ゝ毛ゝゝゝ別ゝゝ
二句ゝゝゝ毛ゝゝゝゝ
くゝゝ別ゝ句ゝゝゝ
ゝゝゝ宮ゝゝ浦ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ暁
ひゝゝゝ毛ゝゝゝゝ
毛ゝゝよゝゝゝゝゝと
句ゝくゝゝゝ宮ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なわと鄰ゝわゝゝゝ
紙のゝゝゝくゝゝゝ
宮衣の浦宮ゝゝゝゝ

五十音ことわり
別るゝかよわ
字よわ若衣の
うをゝ風のし
をうゝのひ
い新ふるまて
とゝ初一てさ
もの袋を連
るくゝあをも
とりいくゝし
川乃百首よあ
ゆひあゝを
一名百よ一段
一名百二名
一名百ひんと
枝ふりすゝ乃
義をれを
表れよ二
ひんをハ
新百の
りんと
よハ百の
末あるを
人倫るわ
末と末
袴よあゝ
苔二句
末紙きろ
袴よあ

ゝハ別のゝ
わ絵の暁の文
衣のゝよ花の
ゝのゝ
ゝあまゝ
ゝのゝ
ゝもの
ゝ暁かい
ゝ句を
ゝ
ゝ
ゝ合点
ゝ一段
ゝ乃
ゝ
ゝ
ゝ

末の焼末

歌の末の字を書
かるゝ末もわるも二句ともし

末より札帳

二句ともとゝ云ゝ
解書し札帳
と出かたもわ末の字をとく
ゝ書の物紙よりんる書
とくゝ文字乃数をとわく
筆ゝ乃出ゝ紙字なるれ
何んなく書ゝ計ゝわ出なゝ
ゝしゝゝ計ゝし末の字乃
んゝたゝ紙なゝわ

末當

末の字二句出渡
出ゝ

末當路

山嶺ゝ末ゝ
末ゝとゝわゝ

山嶺ゝ末ゝ路ゝ末ゝ
ゆく道ゝ乃國ゝわゝ
ゝゝくゝあゝ山嶺をゝ
ゝゝもゝれゝ末ゝの山路ゝ
といゝく末當山乃中ゝ
たゝれゝ山嶺ゝ化淮ゝ
ゝ迎ゝ清ゝん雲
ゝ

清ん雲

きゝす一

野鶏一ゝとゝ
清雲ゝゝゝの雑ゝ
数乃雲紙角清ゝゝ
入ゝゝ云ゝ云ハゝん雑ゝ
のゝく前ゝ空の玉未明ゝ
ゆゝゝくゝゝ紙鳴ゝ物ゝ
空ゝゝ人ゝ角長物ゝ

うまたちのうちと計へしも
雑々の書にるわ雑三の部
なるべしかれをハ西面し
桐 桐も初雑よりる絶るわ
連りさのこてあつハ
無相めく一産より二句あり情
要をいふ面こんをとるまこと
謝よハかれく用ふるものと
物乃桐一るく 稙桐とかを
久へくと一るへし此外
きりはやきりはつ面つ桐火
桐 桐乃若ホの焼ホもの
す稙桐もるさ所桐かり
をうへくと一るへし此三句
の桐と初面し但桐つかきり
面りを雑るかも稙桐より

ハ二句ちと
小祭 こまつり みそもかるの法附ホ
祭なりの新月下面の
日なり完平元年ほりまち
狐 きつね 只一謝よハきつと計も
こつ狐こつ野狐小狐のたか
狐文野手 稲荷 いなり の新婦ホ
乃かをへく今一るへし狐
川を狐乃字よあ次とい
面りまつまこ対くもこと
ケ面りくをこ面りくこ
面し

君ホと君ホ 三句ちも
君 人倫を恵 依句 紙一大
ちをこ 那人倫一大恵

[illegible]天子の[illegible]事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]帝[illegible]事[illegible]
[illegible]
[illegible]

霧乃籬　源相　澤相　右

ちこ垣ゆハ回面をきこゆ

霧ゆ　あ〻〻み雪のひ

海ゆ〻〻あるゆし

御よい雪ちと二あり〻く雪の

ひきと一ゆと二なり

雪の音　雪沼ひ

ふる　のゆ〻相し

時り相し時り相ゆも相雪の

ゆとゆく別よ海さを見ゆ

雪ゆちゆ〻沢雪不動ゆん

音ゆ海きと相ゆも相ゆち

只林の雪の音し

きゆゆ〻ゆよ　月沢の月二句

源へ　泉生

ゆも沼ゆゆ〻と〻ひ月沢の

月と云ハむ月　さ月　夕月

ゆ〻〻ゆ月の事し月日の

ゆ〻く〻〻〻く〻〻云も月

沢の月なゆ〻の月雪

ゆハ付く〻も〻く〻も〻ゆ沢

〻〻ゆの云ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

沢ゆ字の処よ書ゆ〻れも

又宴よ〻ゆ〻ゆ

きゆ〻〻〻ゆ　夜二句きゆ海

ゆ〻

きゆ字　ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆきいゆ〻

ゆ〻〻〻ゆ〻ゆの類ゆ〻ゆ二句

ゆ〻〻〻ゆよ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

ゆ〻のきゆ字ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

ゆ〻ゆ沢ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆん

と云きわ乃河瀬よハ一座よ二
あり玉ふをとゝくゝとへし

曲水宴　三月三日ふるこ

祇園会　六月七日なり

乞巧奠　七夕ちをまつること
なり

小野祭　八月酉日なり

ささわ原の駒　佐流の若ゑも
秋るゝ

ささ原くゝり　ゝ衣数なり
月のゆ袖を踏ま

りくゝり事

題

夕雲雨　只一雨よりの雨ゝ言と
と一ゝ云へ　歌不續く
夕湯殿言ふ物を丁は種次　蒙歌
歌京ゝ夕雲よ同しゝ
夕字ゝ別るれ二句のかしさま
ゝも夕雲とゝ言ゝ八面を
言ゝ夕雲の風の字体ゝ
雲ゝれも乃字夫の字より
不雨

夕雲と云ふ　明かのゝと結く
いくゝ所しゝう次
行越ふハあゝ行雨を種と
二句ゝと同事の間よ結よ

[illegible]らくらもめあらとゝもホ
の数るも

夕ゆう

連ホ二連よい三あるもの
夕とも[illegible]ホ一法
あまこそ一連四句物も連よいせさ
と数て一連句お傳ホしくゝ句
乃物しゆゆい連ホもゆの字乃
裏よ酒まそ連ホ人とゆゆと
いも句ゆゆゆと面をゆし
ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
アと和合連よいゆと六あり連
よい八句ゆもわ数ゆよ傳ゆ二句
三句あゆいゆゆゆ傳ゆゆの字
ゆゆの字をゆゆ句ゆ数よ
傳ゆゆも傳よゆゆゆゆも和合
一連よ八あゆゆと不知ゆゆとゆゆゆ

せさこの字ハ七句ゆゆ
知へゆゆゆよ巻吟人宗た
ゆゆれゆゆ落ゆ句ゆゆ乃云
大巻ゆて巻物乃ゆゆ
巻巻ゆれ巻ゆむの巻ゆゆハ二句連

夕ゆう

夜ゆ兵一ゆ吟ふよあゆ
す兵夜の名ゆれゆゆ
字ゆ乃字ゆよい三句連ゆ長し
巻の字ゆ二句連ゆ云ゆ
一組連よいゆゆ巻ゆ
風ゆゆ今一句ゆをゆゆ
あゆゆ吟吟ゆゆの字ハの用
よいゆゆゆゆふよゆゆ
巻ホ三句連ゆふよ巻
連ゆ連ホもゆ二句白雨と出ゆハ
夫海森 由已法橋 山谷ゆ句
よあゆゆゆさ巻ゆハ丸ゆ概

筆の所書始め文字なり正
字なれば文の字立の字よ
二句可は編義なるべし新式す
字なれば句はいまい言のちく
三句字字も勢ありやうの文字
あるべしべし文字ちんかしべし
とく情景短冊よいうねえ
歌道不和俗の人弘し業
文字弱ちあるべし和なり
古人ゆれりまきしし言書と法
流人へりくきすあとりも
鄭玄と云文字なるべくみ紙
古牡鶏共不肯と中流の道
義九よ正所ゆみ沖む強湯
のは義るわ

久立小 雲と付くまり越し
電雷小寄は稀と新
式りあり

久立乃毎ハ 毎立の所るり
毎と云字りも

三句毎所毎中毎同
久立小 明るとと繋く夜と
毎立字久立言ふあり九葉
毎立字久立立六月七月の
毎よもりあり明る夜九
分よのこまるんくく夜ハまくく
所みと云ままと久立のるくく
毎日くくしのくくおもまれハ
秋まるる人我のあり

久月 久荷の月乃まくくみの
字へあり月九所九言

月数字と連よりも二あまハ雅
ゑハ句体をくへこまくへした
をくまに入れるゆこゝろ月時ゆ
いたまにもれをうゆ角
名月歌　歌の字ハあまとも雅
名月　名ハ八日の事なり
されど名有歌と云まさらう
次角ゆ寸時ハ紙帖なり正流
きあ文字の字よくゆ
紀行
名行　辰星と云星の名なり
天氣ハ苦ハ変なり
とハ雑し星ハ角を可見月
と日ハ二句なり

名山　名ハよあらゆ名
の清山なり
名川　肥後乃名なる和
よ書の字よ不錯
俗句雅よ角
名りか　名も書の字ハ不錯
ありあやまり字ハ二句錯と
対くもゆる
時ハよ伝ゆ寸あり句なり
句時ハおも名時ハ
雅句角
名の字よ三句俗句雅
よ角
瓢箪　瓢箪ハ秋
趣お瓢とゆ角

[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]圓[illegible]の瓢と
章と二[illegible]を[illegible]瓢[illegible]
とのこ章[illegible]食[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

世つと数のよろくも少と雖
句まへ〳〵新武よりひ雪ちん
穿鑿と世中と中古と当世と
既く〳〵不同あるくむつ〳〵き
者知やもなを屋うま雖ろを
心理を変よりも去付行ろゆせ
他の雪とくハ新乃雪波の雪
歌の雪ホるもハ人句乃
新心ちを新武よりも似物
乃雪ハ名別乃ろるわとこに
海こちの雪ま雖ろハ七句云
雪〳〵秋ま秋ひ武句を煙し
ま迎ハ紙凛ふし
富士の雪連ま近年雪の
雪のこと〳〵清を雪とし初
雪をこを所ハを武の

京師一万葉の句を初るろう
和歌の不和侍ハ句ま万葉集を
わらめ沢先生をあるく〳〵ふ
ま雪〳〵雪を雪ハ雖ま三万
葉の句を用く富士の雪
を雖なち清も物雪も皆
変ま雪なしわ富士の称ま
姉り清む雪ハ六月の雪乃
日きえ〳〵ちち新姉ろるわと
侍ろ上ハ今こを所今雪ハ同ろ
わ遠もろ先ま代の句を用ろ
ハ道の句ちを清ま迎義
乃清も富士の煙ハ雪きれ
ともこのろハ煙乃句ゆうま
ちむと古今の扉ま侍ろ寸や
世間万事波浪の批判ろ人

古今を統攝わせ一事多く
海ゝく連綿よ万葉の名を
不貴事あるべきや宗祇宗
長時ふまハ富士の雪を雑よ
せゝ詠しと代赤人の田子
乃浦の名を初古今の名乃
部よへくあ迷も定家卿く澄
の時万葉の名へ不絶月
と推量しくみよあくあ
定しとへわ色和歌絶えの初
を不知故絶ゝむうるはを
とへゆんとひとゝ浦と者
て者ゝ名の海ゝものを業
平のよめ名を伊勢物語て
見ゝや一日よくひくゝわと
二条后を死人とひくく

よめ所名ゝ所ゝ事ゝ
殊縁ゝれくゝく初古今の
長傷の部ハ入ら所ひ集を
連歌の古姫乃袖とゝさは
ひ名も長傷の名なり意
の初よへさ絶も為の名ゝ
あゝ名といんや尚絶この
賢ひ撰集ハあゝ事と
ゆゝ初ゝ初古今の初を
作ゝく万葉のゝの日者
えくゝの歌ゆなわと作
しく絶ゝゝ名を屋よ
ゝへ者乃種ゝいくゝあゝ
面ゝゝ次謙長宗祇宗長九ん
ゝ式作ゝく清と初ゝ八変
あゝ只富士乃雪ハ雑ゝ寸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てを消ぬるものよりそれ
を雪下も汁も皆まことの
かを雪のひさしも雪乃清
事も多まあまを皆まを
ゆ雪をちよいうをふるう
ゑと

雪乃山　二文あり一はいまと
あのめく絵りを
山なり雪まをわきの彩こえハ
浪花しみこ非山数二ゆを
矢竹の雪山しも白髪ふゆく
雪このりしも非山数浦
花よい嶋くをふも成るり
清くまを雪の山とれをえ
雪雪山をあらへ

義小幼二句ゑし殺さめ
月のゑもるるとも二句
なり連よハ七句をを俳よい
文句嶋へ義彩ふるわと
いへともうつの字を絵へを
彩ふるあるもきるも
義とをを成し俳句彩を花
義ちを恋りもるを彩ふ
りもあるを成し去秋の義
と云ハ義のをくるを明く
注事ゑ義と絵よあるを用
し事と去絵よのをを成
年月日時乃ゑ明とたへ
高云義をくを彩ふを
あるを成と云事と去の彩を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

事ハ句なとゝ中おくゆくゑ
しむ有しもいかの身の極くゑ
世の極くゑのこの足わく
あらうのゆくゑたちの道ゑん
ゆくゑもれ極くゑ糸の極
くゑのくハ句なの文字よ
わらさ所ゆへ行の字末の
字よ三句極くし
ゆくゑ ゆきくゆきうく
二句ゑくハ雅楽
雅還とりの字なくゑ
有なりとつゝ
もり末もり末 二句くあるし
俳よハゆくゑ三
もり末二ゑ句ゆくゑく
ゆくゑくハ連ハ月句と句人
句雅りハ三句ゑゆくゑ
とくわを極句末ゑ
とわを極ゑゆくゑ